地域への感謝と恩返しの気持ちを作品に

辻　翔平　山口／木工挽物職人

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催・レクサス）は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター（コラボレーター）が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏（建築家）、廣川玉枝氏（SOMARTA クリエイティブディレクター）、森永邦彦氏（ANREALAGE／代表取締役社長・デザイナー）、辰野しずか氏（クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー）が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。山口県選出の匠、辻翔平さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

1月24日、プレゼンテーションにて

商談会で作品を説明する辻さん

広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

スーパーバイザー
小山　薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。

木工挽物のとりこに

辻翔平さんが手掛けるのは木工挽物。木材をろくろや旋盤でひき、椀や鉢、盆など円形の器物をつくる技術で、瀬戸物などの普及しない江戸時代以前には、この種の食器が一般に多く使われていた。

幼いころから工作が好きだった辻さんは、大学2年のインターンシップで木工挽物に出会った。回転する木材に刃物があてられ木くずが飛んでいく中、形づくられていく様子を見た瞬間、挽物の魅力に引きこまれた。大学院終了後、家具の産地である福岡県大川市のインテリア商社に勤務。福岡県立田川高等技術専門校を卒業した後の2015年5月に妻の実家である下関市に移住し工房「ムクロジ木器」を構えた。

のどかな風景が広がる下関市豊浦町宇賀地区

「地域への恩返しを込めて」

移住を決断した理由の一つに「子どもには古里を持たせてやりたい」との思いもあった。奈良県吉野町出身の辻さんは、父親の仕事の関係で小学5年の時に兵庫県へ、中学2年で福岡県へ引っ越した経験から、心の中に「古里がない」というコンプレックスを抱いていたからだ。

18年1月に工房を現在の場所に移した。「地元の人たちとうまくやっていけるだろうか」。移住の際にはそんな不安もあったが、場所や機械の提供など多くの人たちが親身になって協力してくれた。子どもだけでなく、辻さん自身も下関は「心の古里」になりつつあった。「自分を受け入れてくれた地域に恩返しがしたい」。そんな気持ちが芽生え始めた時、「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」と出会い、新たな発想や刺激を得る機会と考え参加した。

右端がサポートメンバーの下川氏、中央は妻の果歩さん

辻さんの仕事道具

ろくろを回転させ木を削り、作品がつくられる

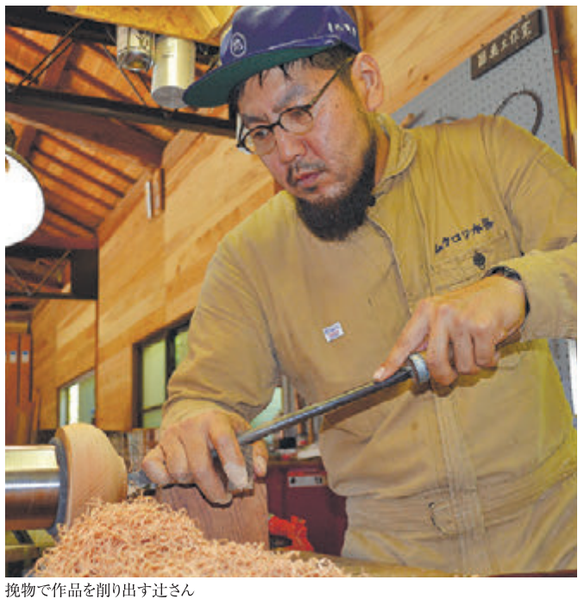
さまざまな「出会い」を形に表現

キックオフ・セッションで下川氏から「寄木のそばちょこができないか」という提案を受けた。日常使うそばちょこにおもちゃのような楽しさや重ねの機能に遊びの要素を加えようと思った。そばちょこの大きさや角度の広がりなど試行錯誤を繰り返した末、これまでの人生を振り返りながら「出会う」をテーマにした作品「kasane（かさね）」にたどり着いた。

クスやケヤキ、スギなど山口県産の木と海外のウォールナットやパドック、パープルハートなど別々の場所で育った木が出会い、二つの異なった形のそばちょこが出会って重なることで形をつくる。二つのそばちょこに違う料理を入れて二つの味が出会い、そしてこの器を使った食事会をきっかけに人と人が出会うなど「出会い」が詰まった器に仕上げた。

エリア・コンサルティングで下川氏から「パッケージングの点から2個1セットにすれば、引き出物やカップルへのプレゼントへの需要につながる」との助言でターゲットの設定が明確になったという。器を二つ重ねることで「オブジェ」になり、重ねた塔を並べることで一つの「面」を作り出していくことができた。

プレゼンテーションでは、一番悩んだという重ねの良さを強調。プロダクトを手にしながら「普段使いのそばちょこが『ハレの日』であるパーティーや飲食店でも利用できる」とPRした。訪れたバイヤーらも木の温もりと手触りの良さなど反応も良く「自分のやってきたことが認めてもらえたかも」と自信につながった。


挽物で作品を削り出す辻さん

「地域・人とのつながりをこれからも大切に」

「地域と自分はつながっているが、地域と作品はどうつながっていくのだろうか」。辻さんにとって改めて地域性について考える機会となった。産地の木でなければ、木製品で地域色を出すのは難しい。今回のプロジェクトで7カ月の長期間で一つの作品を作り上げるプロセスや作品を通して、自分の技術や地域のことを見つめ直すこともできた。

これからも地元の木を使って作品をつくり、下関の木材をブランディング化していくのが当面の目標。それが辻さんの考える「古里」への恩返しとつながっていく。

完成プロダクト「ka sa ne（かさね）」

辻　翔平
山口／木工挽物職人

1983年生まれ。2009年九州産業大学大学院芸術研究科デザイン専攻を修了後、家具の産地である福岡県大川市のインテリアの商社にて営業、デザインに従事。在学中より研究課題の木工挽物で制作する木の器を生業とする為、一念発起し同社を退社。2015年福岡県立田川高等技術専門校木工家具科を卒業後、同年山口県下関市にて「ムクロジ木器」を創業。自身で木を伐り、県産木の良さを伝える活動を行う。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT